Fate
フェイト・ゼロ
11

第52話

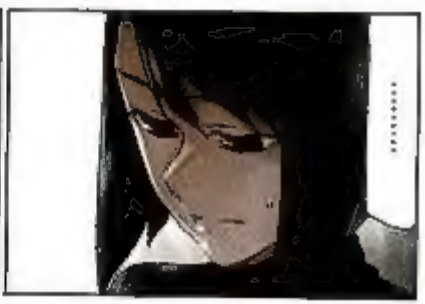
セイバーの
気配がない

昨夜の会見で仕入れた
ライター陣営の拠点を
目指して発ったが

セイバーがライターを
引きずり出してさえくれれば
見習い魔術師の
マスターの暗殺など
もはや容易い

彼女の状態は
今は……

解っている
承知の上だ



……

第52話

Fate/ゼロ
フェイト/ゼロ

漫画 真じろう
原作 虚淵玄/TYPE-MOON
(ニトロプラス)

第 52 話
001

第 53 話
037

第 54 話
069

第 55 話
103

第 56 話
133

番 外 編
◆Master's personality◆
171

あ――
キリッグだ――
――夢じゃないのね
本当に――
また逢いに来てくれたのね――
ああそうだよ

私はね……
幸せだよ……
恋をして……
愛されて……
夫と 娘と
九年も……
あなたは
全てを与えて
くれた……
私には望むべくも
なかったこの世の
幸せの全てを……

……
すまない
色々な
約束を果たせ
なかった

ううん
いいの
もう
私が取り
こぼした幸せが
あるなら……
残りは全部
イリヤにあげて
あなたの娘に——
私たちの 大切な
イリヤに

いつかイリヤを
この国に還れて
きてあげて
サクラの花を
夏の雪を……
あの子に私が
見られなかった
ものを全部……
見せてあげて

これを……
返さないと
……ね……
ポケ

わかった

……ッ

アイリ……
それがないと
君は――

これは……
この先
あなたにこそ
必要なもの
あなたが
最後の戦いに
挑むとき きっと
役に立つ……
私は……大丈夫
舞弥さんが
守ってくれる…
…だから……

……
判った
じゃあ
行って
くるよ
はい
お気を
つけて
あなた

今日しゅうにライダーのマスターを仕留めてくる
セイバーは先行しているな？
はい 今朝方あなたが来る少し前に
良し 舞弥 君は引き続きアイリの警護を頼む
分かりました
あの切嗣？

どうしたっ
やっと
戻り
ましたね
昔の
あなたの
顔に
……そうか

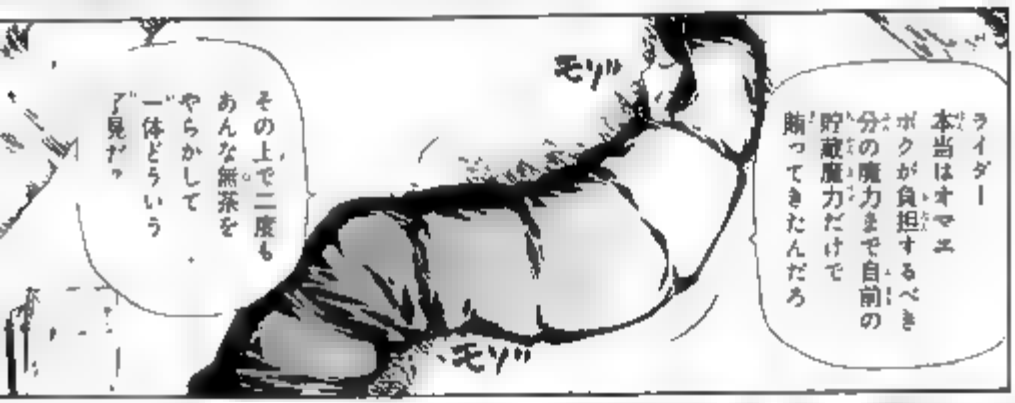
美味っ
うかっ
これは
いいや
不味い
モグ
モグ
ムッシャ
ムッシャ
まるで
お米に
かけて
なかった
最初の風味は
食い意地か
食いたいんなら
さっさと実体化
できるくらいまで
回復しろよ

ここが何処だか解ってるよな？
オマエを召喚した場所だよ
霊格は極上とは言わないまでもそれなりだし
あの晩の魔法陣もまだ解れてない
オマエにとって冬木でいちばん相性のいい地脈はここだろ？
回復の効率も段違いに捗るはずだ
ボクは今日 日ここにいる
何もしないで寝てるから死なない程度でいくらでも魔力を持っていけばいい
そうすればオマエも少しはマシになるだろ
バカ！オマエこそさっさと寝えよ！
いざって時にオマエが動けないとボクが危ないんだからな

結局オマエの
切り札って実は
とんでもなく魔力を
食い潰すんだろ

嬉つけ
あれだけ啖呵切った
大魔術なら
覚醒するだけでも
大事なんだ
その点 最初に
号令をかけるのは
オマエ一人
なんだから
「座」にいる連中に
呼びかけるだけで
とんでもなく消耗
するはずだろ

最初はボクも
見過ごしてたよ
オマエが言うとおり
並外れて効率のいい
宝具なのかと思ってた
最初にアサシンの
連中を倒したとき
オマエがボクの
魔術回路から
持っていった魔力量
どう考えても
少なすぎたからな


ライダー
本当はオマエ
ボクが負担するべき
分の魔力まで自前の
貯蔵魔力だけで
賄ってきたんだろ
その上で二度も
あんな無茶を
やらかして
一体どういう
了見だ

全開の魔力有事
防生を巻き込めば
そのときは
令呪も使
くかねんかっ

ボクは――
それでいいんだ
聖杯をただオマエに獲ってきてもらうだけなんて嫌だ
これはボクが始めた戦いだ
ボクが血を流して犠牲を払ってその上で勝ち上がるんでなきゃ意味がないんだ
聖杯の使い途なんて知るか！
ボクはな後のことはどうだっていいただ証明したいだけだ！
確かめたいだけだ！
このボクが――こんなボクにだってこの手で掴み取れるものがあるんだってことを！

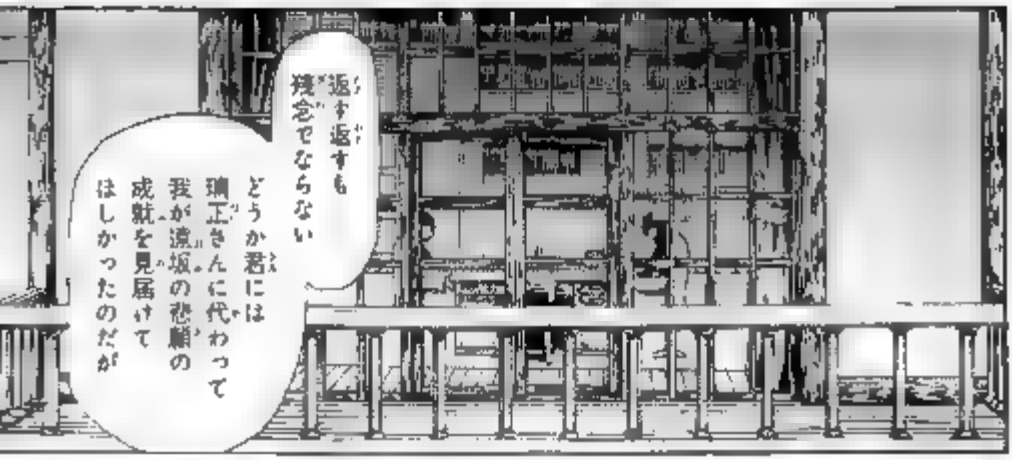
そ、よ変な
本当まさ
場合の話かよな
え？
皆力血眼
ぐっちゃぐちゃ
るか
俺の未来で皆が
レやぁか本当
増殖ゲームロボ
ゲーム保証よ
ー
な
違へ
そりや
そうだけど
でも
余はな
以前
もせ
在るか無いかも
知れぬ
を
追いかけて戦ゝ
とがある
異界でも身を
見せてやると
手・叱る数い
余は世界を救ふ
為に
【呪】
全ての口車に乗っ
破
そやず
お調子者と断ゃ
ぬぐせへ
乱神の
再現ゝ
そ
ゝ
先ゝ

おい
ライダー
でもボクは
それでも
オマエのマスター
なんだぞ

この調子で
夜までに
との程度まで
回復できそうだ
だったら
なんでわざわざ
セイバーとも
戦うんだ

だってオマエ
もうアイツのことは
眼中にないみたいに
言ってたしゃないか
余裕がないなら
今度は戦いの回数も
絞っていくべきだ
アーチャーは
オマエ勝手に変な
約束しちゃったし
今さら後には退け
ないんだろうけどさ
セイバーは
他の奴に相手
させて脱落
するのを待つ
手だってある
な なんだよ
ボクは当たり前の
戦略を話してる
だけだろうが！
デコピン
されてる
気がする
「コの」
何だよ
それ？
余が倒さねば
なんのの
それか何
余の裾が
余が正しへ征して
やらねば永遠
道を踏み誤っ
生まれ
それではあまり
不憫に過ぎる

まあ
好きにすれば
いいさ
スピー
ん…
いかん
無理せんで
寝ていろ坊ぞ
今の重傷は
体質 やか戦
冬木を過去
する前に言
ご挨拶
上かりました
そうか
上がって少し
話をしていく
時間はあるかね？
ええ 問題
ありません


返す返すも
残念でならない
どうか君には
瑞正さんに代わって
我が流坂の悲願の
成就を見届けて
ほしかったのだが

そうと知っていれば
私とて昨夜の会合に
君を同伴したりは
しなかっただろう

導師には最後まで
ご迷惑をおかけ
してしまいました
面目次第も
ありません

君のスタンド
プレイはまあ
遺憾ではあるが
あくまで私に有利な
展開を期してのもの
だったのだろうと
理解している
代行者なりの流儀
だったのかもしれんが
やはり私に対しては
事前なり事後なりに
一言欲しかった

たしかに我々を
引き合わせた
契機は聖杯戦争
だったわけだが
経緯はどうあれ
私は君という
弟子を得たことを
今でも誇りに
思っている
素養については
まあ
致し方ないとはいえ
修練に励む求道者
としての姿勢は
私でさえ敬服させ
られるものだった

なぁ綺礼
とうか今後とも
亡きお父上のように
君もまた遠坂との
縁故を保っていって
ほしいと思うのだが
どうだろう？
願ってもない
お言葉です

まさに君は師と
なるべき人格の
持ち主だ
ぜひ我が娘にも
見習わせたい
今回の聖杯戦争が
終わった後も君には
兄弟子として凛の
指導に当たって
欲しいのだ

導師
これは？
簡略なものではあるが遺言状のようなものだ
万が、ということも考えておくべきだと思ってね
凛に遺坂の家督を譲る旨の署名とアレの成人までの後見人として君を指名しておいた
これを「時計塔」に届けてくれれば後の諸事は協会の方で面倒を見てくれる
お任せください
不肖ながらも御息女については責任を持って見届けさせていただきます
ありがとう
納礼
これは君個人に対して私から贈りたい
開けてみたまえ

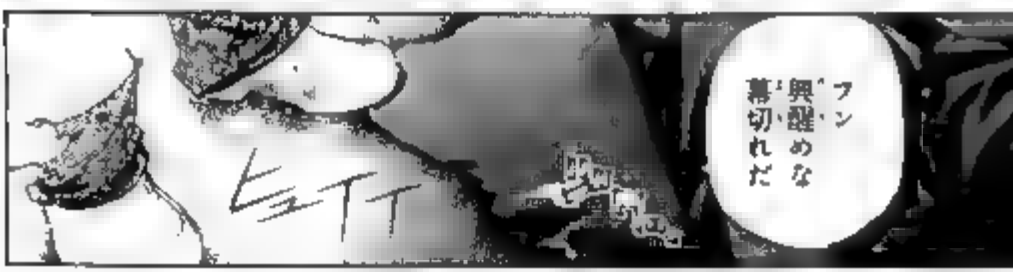
これは
コト
アゾット剣か
当家伝来の
宝石細工でね
魔力を充填して
おけば礼装
としても使える
君が遠坂の
魔導を修め
見習いの課程を
終えたことを
証明する品だ
我が師よ
至らぬこの身に
慮ね慮ねのご厚意
感謝の言葉も
ありません

君にこそ感謝だ
首輪殺礼
これで私は
後顧の憂いなく
最後の戦いに
臨むことができる
長く引き留めて
しまって
済まないね
飛行機の時間に
間に合うと
いいのだが
いえ 心配は
ご無用です
堀師

もとより飛行機の
予約などして
おりませんので

……あ？

カラン

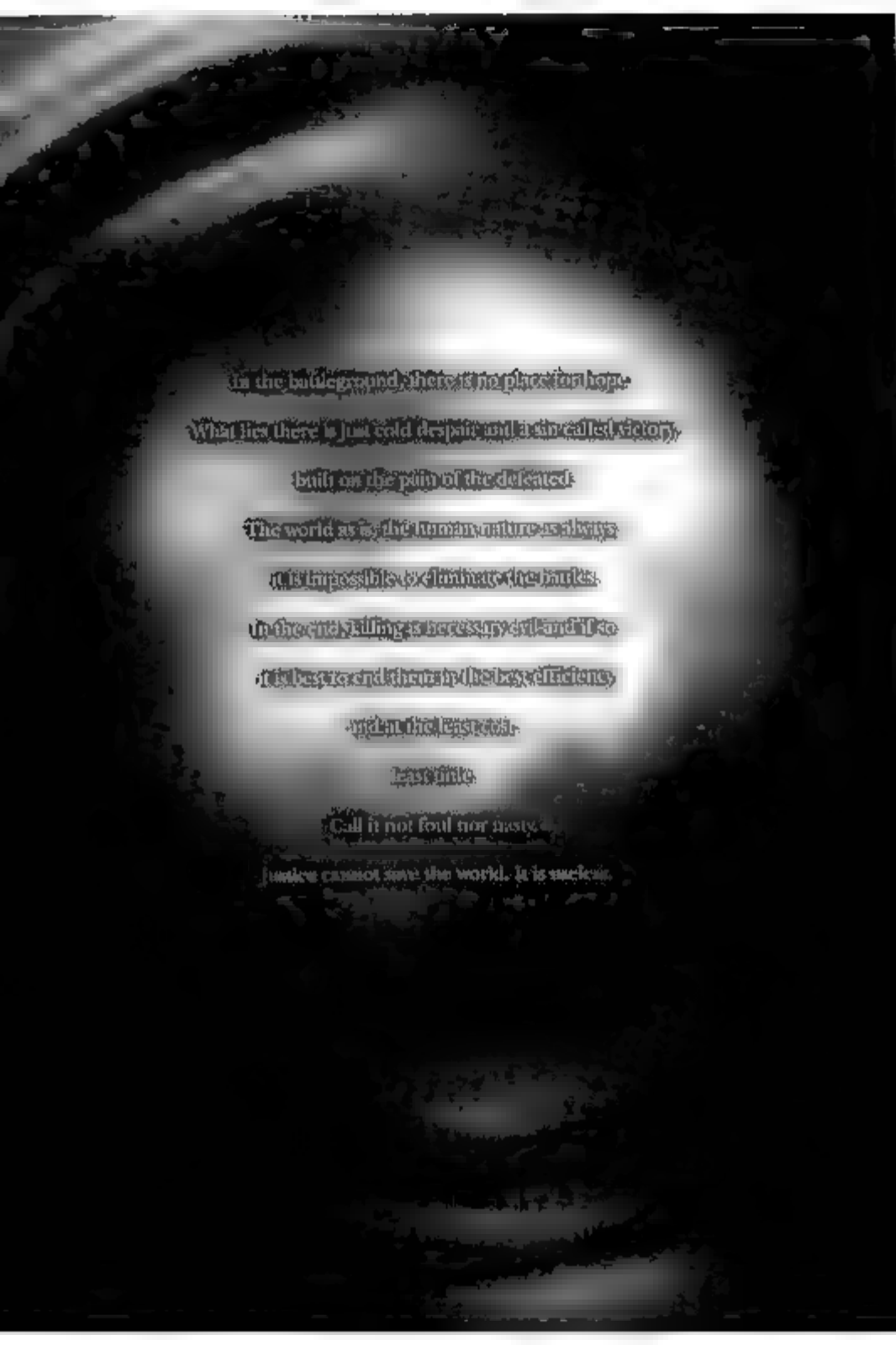

フン
興醒めな
幕切れだ

もう一閃煌ぐらい
あるかと期待
していたのだがな
見よ
この間抜けた
死に顔を
最後まで己の
愚劣さに気付か
なんだという面だ

すぐ傍に
霊体化した
サーヴァントを
待らせていたのだ
油断したのも
無理はあるまい
早くも踏歩を
身につけたか
その進歩ぶりは
褒めておこう
本当に異存は
ないのだな？
英雄王
ギルガメッシュ
お前が我を
飽きさせぬ限りに
於ではな
さもなくば綺礼
お前もまたここに
転がっている骸の
ように打ち捨て
られるまでのことだ
覚悟を
問われるべきは
むしろお前だぞ
汝の身は我の下に
我が命運は汝の剣に
聖杯のよるべに従い
この意 この理に
従うのなら——
誓おう
汝の供物を
我が血肉と成す
言峰綺礼——
新たなる
マスターよ

さあ終礼
始めるとしようか
お前の采配で
見事この茶番に
幕を引くがいい
褒美に駆逐を
賜わそう
異存はない
英雄王
お前もせいぜい
愉しむことだ
望む答えを得る
その瞬間まで
この身は道化に
甘んじるとも

Fate

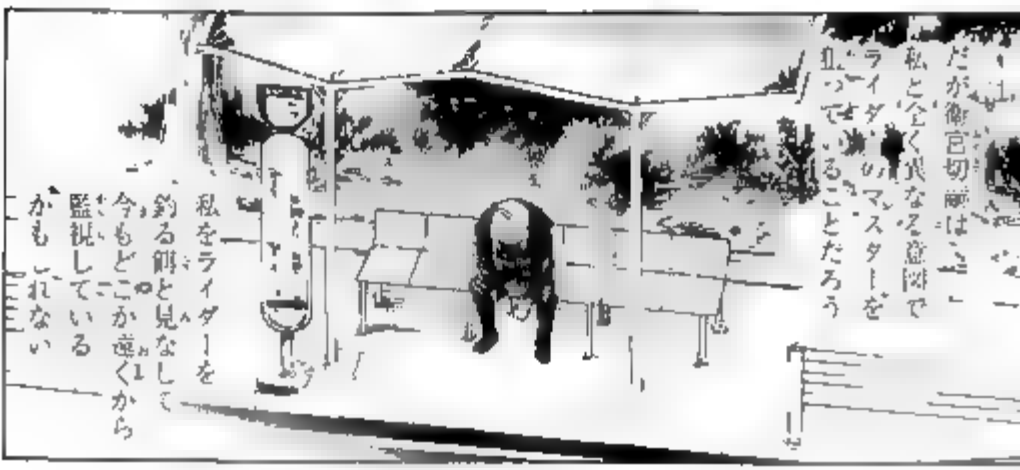

In the battleground, there is no place for hope.
What lies there is just cold despair and a so-called victory,
built on the pain of the defeated.
The world as is, the human culture as always,
it is impossible to eliminate the battles.
In the end, killing is necessary evil and if so,
it is best to end them by the best efficiency,
and in the least cruel,
least time.
Call it not foul nor nasty.
Justice cannot save the world. It is useless.

第 53 話

—37:02:20

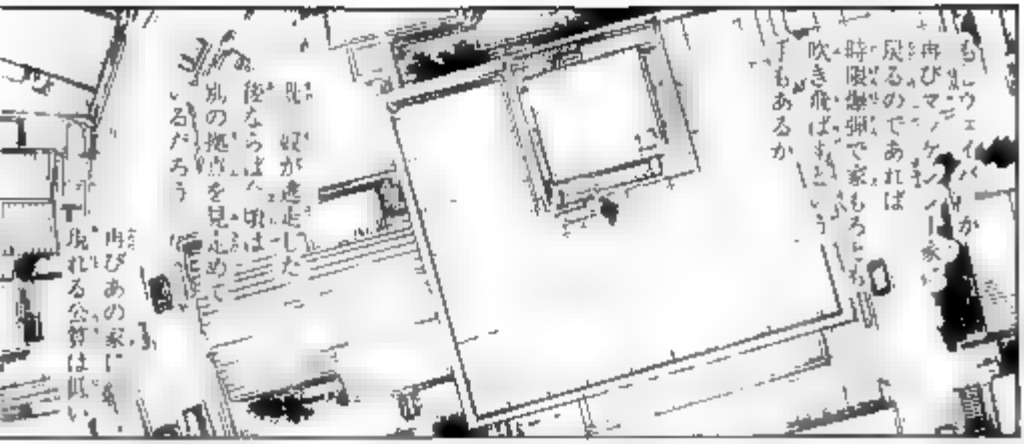
アーチャーのマスターからの情報通りだ
住人の話では今は私たが俺か孫とその友人か逗留しているとのこと

ライダーは逃走するような姿ではない
行き違いになったか
あの家の住人はライダーのマスターに誑かされただけの一般人
奴か私の氷河に気付いたならば誘りを持って戦いい相応しい場所での対決を望むだろう


だが御宮切嗣はこれ私と全く異なる意図でライダーのマスターを狙っていることだろう
私をライダーを釣る餌と見なして今もどこか遠くから監視しているかもしれない

『王の軍勢』
くっ……
衛宮切嗣……
今度は一体
どのような策を
弄するつもりだ？

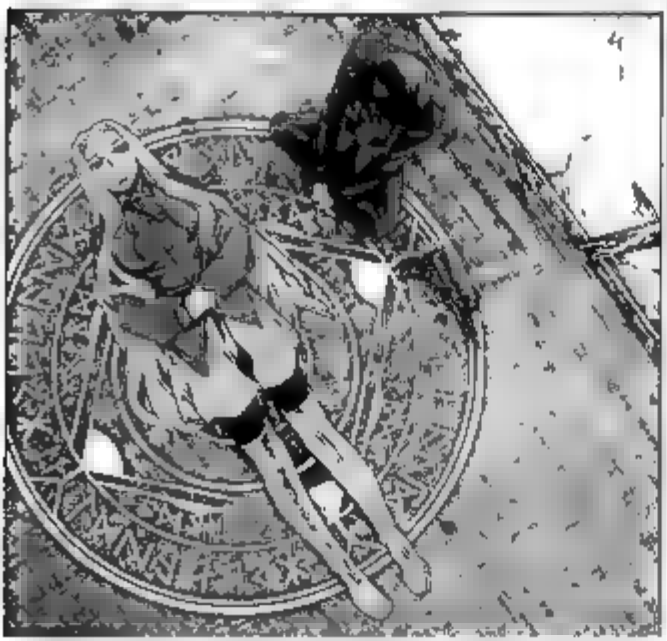
所在を知った翌朝、早々から家を出てはいらないというのはタイミングとして出来過ぎている
ウェルヘルト
敵襲を察知して逃走した可能性はかなり高いと考えている

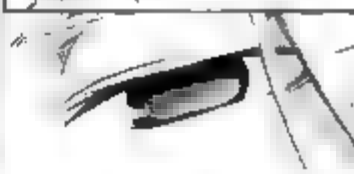

もしウェイバーが
再びマンケイン家に
戻るのであれば
時限爆弾で家もろとも
吹き飛ばすという
手もあるか
ヤツが逃走した
後ならばヤツは
別の拠点を見つめて
いるだろう
再びあの家に
現れる公算は低い

ただの一般人の家を
隠れ蓑に拠点
選ぶとはな
わざわざ解りやすい
場所に入低な工房を
構えた御三家や
ケイネスよりも
余程賢明な策略だ
やはり判断が
きる魔術師か
あの家ごと僧をかける
なんてことは
あの老夫婦を
利用して民に紛れる
という策も通用
しないだろう

偶然である
捨てきれない
魔術師か

時間だけが
過ぎていく

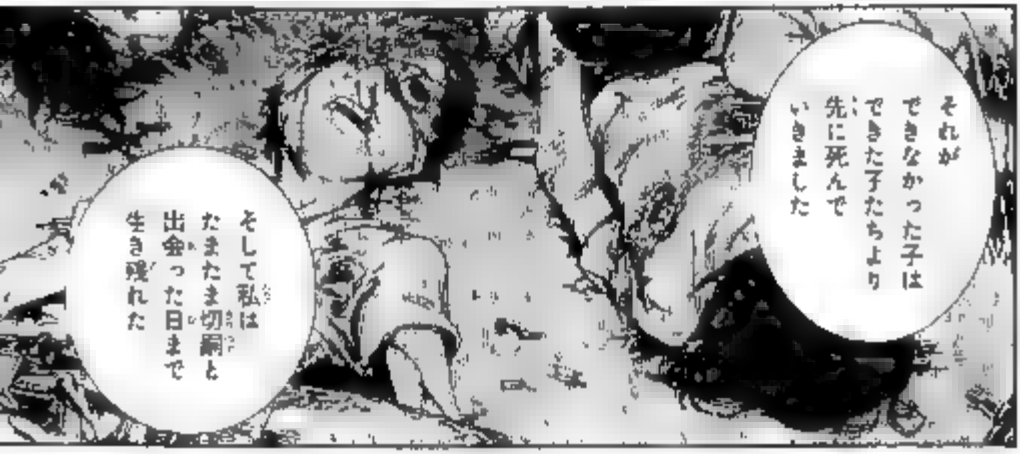




ねえ
舞弥さん
あなたは
なぜ切嗣の
ために戦うの？
それ
以外に何も
ないからです
私には
家族のことも
自分の名前も
思い出せない
久宇舞弥という
名前は切嗣が
最初に作ってくれた
偽造パスポートの
名義です
――えっ？

そのうちに
誰かが思い
ついたんです
兵隊を徴用して
訓練するより
子供を攫ってきて
銃を持たせた方が
安上がりで
手っ取り早いとね

だから銃を
渡されるより
以前のことは
憶えてません
敵を狙って
銃爪を引く
そういう機能
だけを残して
あとは全てを
捨て去って
そんな風に
先に精神が壊れて
しまったから
その分だけ生命が
長持ちしたんです


それが
できなかった子は
できた子たちより
先に死んで
いきました
そして私は
たまたま切嗣と
出会った日まで
生き残れた

私はヒトとしての中身が死んでいる
ただ外側の器だけがまだ動いて"昔馴染みの機能を維持してます
それが私の"生命"です
拾ったのは切嗣だ
だから切嗣が好きなように使ってくれればいい

……それが私がここにいる理由です

むしろ私には……
マダム
貴女の熱意こそ意外だった
――え？

貴女は
生まれ育った城に
閉し込められたまま
外の世界を知らずに
生きてきた
そんな貴女が
世界を変革しよう
という切嗣のために
あれほど必死になって
戦うだなんて
私は——
そうね
本当は切嗣の理想が
どういうものか
きちんと理解できて
いるわけではないわ

結局 解った風な
ふりをしていた
だけなのかもね
たゞ愛しい人と
共に歩みたいと
思っただけなのかも
舞弥さんの言う通り
私は切嗣が変えようと
している世界のことを
まるで解ってない
私の中の理想なんて
何もかも切嗣の
受け売りでしかない
そうなの
ですか？
ええ
でも切嗣
には内緒
切嗣には
いつだって
彼が正しいと
言い聞かせてきた
彼の理想には
私が命を捧げる
だけの価値が
あるってね
そうやって
理解者のふりを
してきたわ
同じ理想を懐いて
そのために
死ぬ女なら——
ただ夫のためだけに
死ぬ女よりよほど
切嗣にとっては
重荷にならない
でしょう？

成る程

ではマダム
貴女には
貴女自身の
ための願いは
ないと？

願いは

いいえ
確かにある

私は切嗣と
セイバーに勝ち
抜いて欲しい

あの二人に
聖杯を掴み
取って欲しい

それは
第三魔法の
達成という
アインツベルンの
悲願ですか？

私が求めて
いるのは
戦いの終焉よ

切嗣が求める通りに
世界の仕組みが変わり
すべての闘争が
終息するならば——

ここ冬木で聖杯を
求め争う戦いに
ついても例外じゃ
ないはずでしょう？

どうか今回の
四度目を最後の
聖杯戦争に
してほしいの

聖杯の器のために
犠牲になる
ホムンクルスを
もうこれ以上
増やしたくない

ご息女の
——ことですか？

ええ

大お爺様の計画では
私より以後の
「聖杯の守り手」は
より機能を洗練された
ホムンクルスに
なるそうよ
大お爺様は今回の
"第四次"が
始まるより以前から
"第五次"の
可能性を見越していた
だから私に
イリヤを
産ませたのよ
もし私と切嗣が
失敗すれば
そのときはあの子が
「天次」の実験台
として採用される
六年後の
真打ちを用意
するためにね
たび胎内に聖杯を
秘め持つのではなく
逆に追加の魔術回路を
さらに外装として
被せることで
肉体そのものを
聖杯の"器"
として機能
させる構想なの

あの子を抱いて
おっぱいを
あげて
でも私には
解ってた
コレも結局は
「器」の部品
でしかないん
だってこと
大切な我が子の
ことをそんな風に
言わなきゃならない
母親の気持ちが
あなたには解る？
あの子も私の孫も
みんな同じように
鏡を覗くたびに
この悲しみを
味わうことになる
いつか本木の
駒杯か満たされる
時が来るまで
この連鎖は
続けられていく
だから私の
この身体だけで
アインツヘルンの
宿命を終わらせたい
もしそれが叶えば
私の魂は運命から
解放され最後まで
ヒトとして御命を
全うできる
ようになる

母親としての情ですか…

そうなのかもね

舞弥さん あなたには想像もつかない？

本当なら解って然るべきなのでしょうが

これでも一度は母親になった身ですから

――え？

私にも実は出産の経験があるんです 意外に思うかもしれませんが

結婚の経験が？

いいえ 父親が誰かも判らない

戦場では私たち女の子は全員兵舎で大人たちに毎晩輪姦されてましたから

親つの頃だったか
ともかく
初潮がきて
すぐでした
子供には名前も
つけてあげ
られなかった
そんな
今では
生きているか
どうかも
判らない
もし死んでいな
かったとしたら
きっとまだ戦場で
殺し合いを続けて
いるでしょう
キャンプでは五歳に
なった子供には銃が
渡されてましたから

驚かれ
ましたか？
でもこんな話
今ではもう
珍しくも
ないんです
最近は世界中の
ゲリラたちが
兵士に子供を使う
費用対効果を
知ってます
私のような経験を
する子供たちは
減るところか
むしろ鰻登りに
増えてるんです

マダム
貴女は初めて見た
世界を美しいと感じて
そこに生きる人々を
幸せだと思ったのが
かもしれない
でも私に言わせれば
あの冬の城から
一歩も出ないで
暮らしていた貴女の
方こそ羨ましかった
この世界の醜さも
おぞましさも
何ひとつ見ることも
なく済んだなんて

こんな世界を
もし本当に違う
形に変えてしまう
ことができる
なら
それを為し遂げる
切嗣になら
この命はどう
使い捨てられよう
とも構わない
あなた
は
切嗣が
理想を
遂げた後
どう
する
つもり？
——生き残る
などと考えては
いません
もし仮に命を
繋いだとしても
もう私に生きる
意味はない
切嗣によって
変革された世界
というのは
きっとそういう
場所でしょう

そんな
ことはない
あなたには
果たさなきゃ
ならない
ことがある
捜さないと
あなたの本当の
名前と家族
それにあなたの
子供の消息を
それは忘れ
去られていい
ことじゃない
はっきりと確かめて
刻みつけていかなきゃ
ならないことよ
そうで
しょうか
もし真に平和な
時代が来るなら
私のような人間の
記憶は悪夢で
しかない
せっかくの理想郷に
憎しみの種を
持ち込むだけでは？
憎がった
傷を徒に開き
痛みをもたらす
だけだ
違うわ
だってあなたの
人生は夢じゃない
歴とした事実
なんだから
それを闇に葬った
上での平和なんて
それこそ罪深い
欺瞞でしかないわ

私 思うの
本当に平和な
世界っていうのは
ただ痛みを忘れて
いられる場所
なんかじゃない
もし一度と痛みを
生まずに済む場所まで
辿り着いたなら
そのとき人間は
過去に置き去りに
してきた痛みや犠牲を
本当の意味で悼んで
偲ぶことが
できるようになるん
じゃないかしら

その言葉は
もっと早くに
切嗣にかけて
あげるべきでした
もしかしたら
彼は今よりずっと
救われていた
かもしれない
——それなら
舞弥さん
あなたが彼に
伝えてあげて
私の言葉で
慰めてあげて
善処は
します
でもそれは
戦いが終わった
後の話です
現状は予断を
許さない
彼も私も当面は
気を抜くことなど
できません
本当に
あなたって
人は
!!

ガ
の怪力、
サ ヴァイトウ
非力な一般人
使い魔による偵察
魔術による
探知であれば
防御結界で
それと知れたはず
そんな前置き抜きに
ヴァイトを投入
してきたのだとしたら
敵は予めこの上域の
ことを知っていた
としか思えない！

……ッ！
呪的処置を施して
皮下に押し込んだ
舞弥の毛髪が
ズキ
ズキ
これは舞弥が死に
近づくほど
痛覚が
生命力が衰えた
ということだ
無線や使い魔で
報告を伝えず
自ら
なかった
ということは

令呪を以て
我が傀儡に
命ず!!
セイバー
土蔵に戻れ!
今すぐに!!
ヒュ

!!
今のは令呪か！

マイヤ！
――ッ！
これは
予想
以上
に
厄介
だ

セイバーッ
マイヤ しっかり！
今すぐ手当てをします 大丈夫だから——
！
ライダーか
マダムを
ライダーが!?
早く外へ逃げてください
だがそれでは——
背負った貴婦人のため、命を投げ出すこの女性もまた騎士なのか
私はたいしょうふ
はやく女性が
たから早く
ヒ——！

マイヤ
どうか切嗣が
来るまで持ち
堪えてください
アイリス
フィールは
必ずや
私が
台風の強襲による
移動が瞬間であった
以上
まだ
まさか本当に
アイダホか

第53話　END

Fate

In the battleground, there is no place for hope

What lies there is only cold despair and a sin called victory.

born of the pain of the defeated

The world as is, the human nature as always

it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary even sanctified so

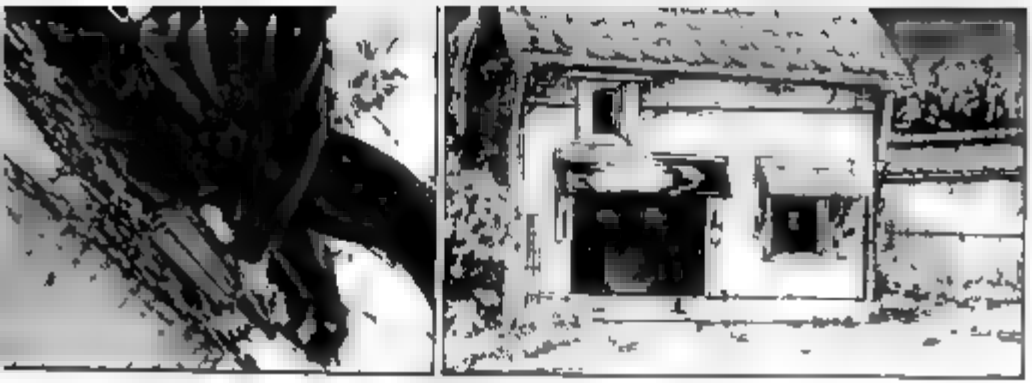
it is best to end them in the best efficiency

and at the least cost

least time

Call it not foul nor nasty

Justice cannot save the world. It is useless.



—36 48 13

第 54 話

遠からずこの少女は死ぬ

だから
悲しみもない
喪失感も
ありえない
それが道理だ
当然の帰結だ
「お前は
ここで死ぬ」
――そう
言って
やればいい
もう任務も
役目もないと
何も思い詰める
必要はないと
「お前は道具
なのだから――」

ためだよ
なくたら
!?
さとは
おくさんの
ために
どこで
おって
ここで
ないたら
ため

僕は——

僕は何かを
致命的に間違えた

何故そんな
勝手な見立てを
今日まで信じて
いられた？

自分の命を道具と
して使い捨て
結果次第でそれを
やり直せる
人間である

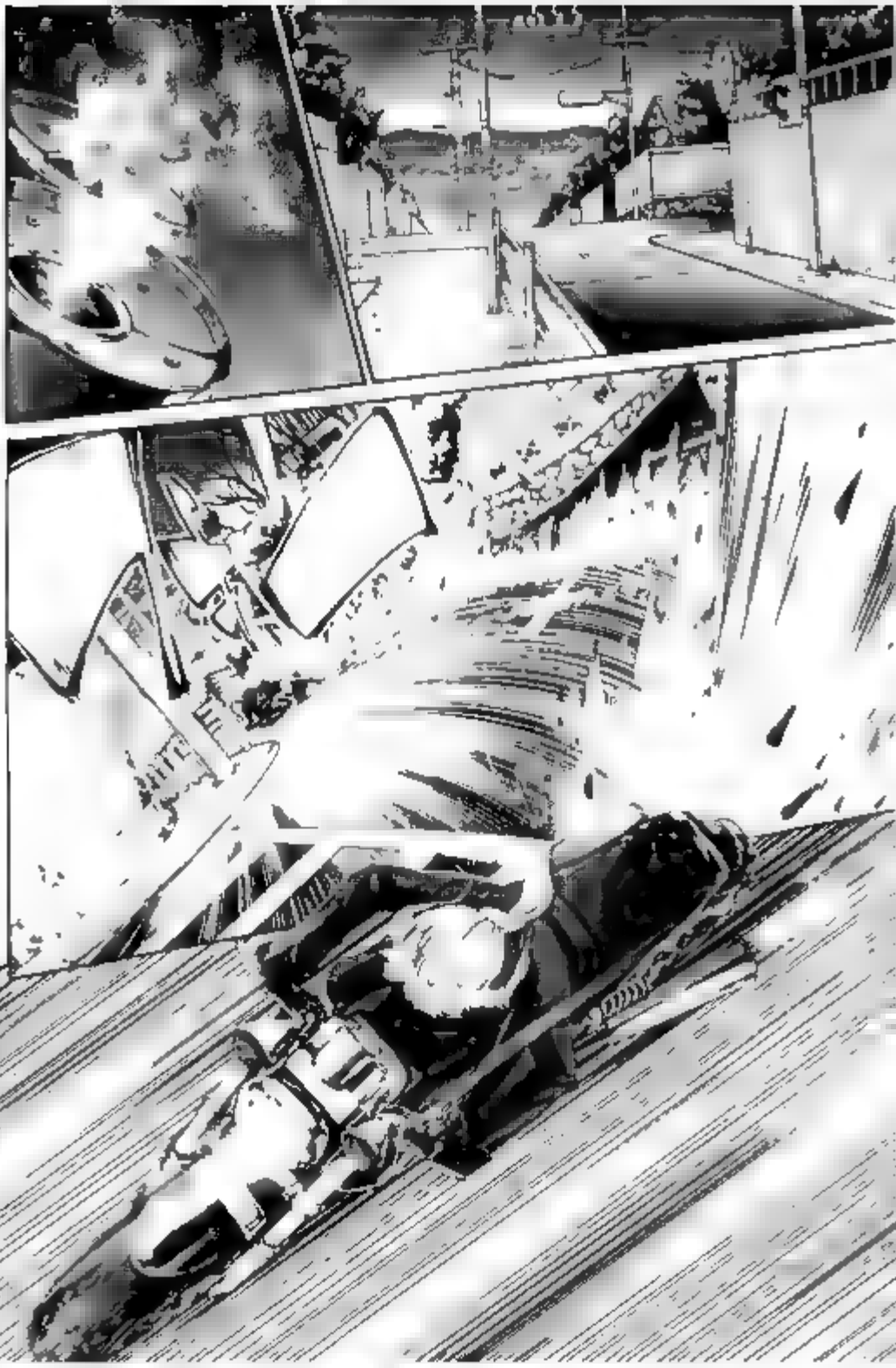
財源か僕と同じ

こんな自分に今
こんな言葉を
かけられる女なら

彼女にはもっと
違う生き方が
死に様があった
はずじゃ

けさ
やっと
むかしの
きおの
キリソク
なったん
だから
こんな
ことで
ゆれたら
だめ
安心しろ
舞弥
後は
セイバーに
任せろ
舞弥 お前の
役目は……
……終わりだ

舞弥
…



なんという加速……
私の挙動Gを最大限引き出すために改造を加えたGを聞いていたが
これは人の身では一生涯慣れないGだろう
なんぼ
これの技術を完全に発揮させてくれる
人外の脚であろうが
ウソつくな
ライダーは
ライダーの脚力を超えた移動で
肉体化できる
みらば
神威の電輪
異端をたき殺す
はずだが

いた！
方角は北
新都を抜けて
冬木の外にまで
逃げ込む腹か
ならばこちらもむしろ好都合
そういうことなら
こちらも道幅の広い
国道を使ってすぐ
この厄介ごとを
自分に処理できる

こいつはきっと今夜私の手編で地を駆けるために生まれたのだな
だけにこの世に生を受けたのだな

いいだろう！
燃え尽きるまで
駆ってやる！

ライダー
おい
あれ
ボクらのことを
追ってきて
ないか？
うん？
はぁ？
誰かと思えば
セイハーか
こりゃ
捜す手間が
省けたわ
バイク？
あれかっ
お前を連れて
この跳躍じゃ
跳べないよ
いや
そんな
無茶な
つうか
なの坊主
オートバイという
乗り物はあんなにも
速いものなのか？

でもたしかに
セイバーのクラスなら
それなりの騎乗スキルが
顕現するだろうし
そう考えれば
有り得るのか
なあ！？
ほぉ
よりにもよって
「騎兵」として
余に挑んできたか

フフン
面白いわ
これでもう
あのけったいな
森の城まで出向く
必要もなくなった
が
そういうことなら
余の方も相応の
態度で臨んで
やらんとなァ

お…降りる
のかよ!?
気が
変わった
あの小娘とは
尋常に〝車輪〟で
勝負を決めてやる

この先の森を抜けていくのにそれなりに長い幅のある道が続いておったよな
フフフ 誂え向きの戦場だ！
あの巣穴さえ…
勝利の剣…
もう目覚め…
眠れぬ狼…
破壊力…
使い…
投げ…
敵…
よし それでいい いいけど慎重にやれよなオマエ！
ハッハッハ！
坊主もようやく闘争の妙味ってモンが解ってきたか
まあ案ずるな！

—36 45:26

間桐雁夜
君は戦場において常に幸運を味方につけるな
神父
こんな小細工に本当に令呪を二つも費やすだけの意味があったのか
案ずる必要はない
私に協力する限り君は惜しむことなく令呪を浪費して構わない
さあ手を出したまえ

ポン
あんた
本当に――
言った通りだ
雁夜
監督役の任を
受け継いだ私には
教会の保管する
令呪を任意に再配分
する権限がある

もういいぞ
バーサーカー
変身能力
とはな
つくづく
バーサーカーの
クラスには惜しい
宝具を持っている
もともとこいつは
他人を装って
武勇を立てた逸話を
幾つも持ってる
英霊だからな
狂化したせいで
ただの「偽装」の能力
にまで劣化している上に
令呪無しには使うことも
すらできなくなった

全程セイバーに執着があるようだな
おかげで命令を実行させるためにもう一つ令呪を使う必要があった
堺が明かんな魔力供給を切りたまえ
この女が本当に聖杯の器なのか
正しくはこの人形の「中身」が――だがな
あと一人か二人のサーヴァントが脱落すれば正体を現すことだろう

聖杯を降ろす
儀式の準備は
こちらで
引き受ける

その間
この女の身柄は
私が預かろう

心配するな
聖杯は約束通り
君に譲り渡す

私には
願望機など
求める理由が
ないのでね

それ以前に
もうひとつ

あんたは俺に
約束した
はずだ 神父

今夜零時に
教会を
訪れるがいい

ああ
その件か
問題
ないとも

そこで遠坂時臣と
対面できるよう
既に段取りは
整えてある

この神父 体制を 企んでいる？
私の父―― 言峰綺礼の死は 遠坂に責任がある
私は息子として 父の仇を討つべく 単独力を借りて 時臣を処断したい
同盟の見返りに 父から継いだ 令呪の譲渡
さらに 聖杯戦争 勝利した暁に 聖杯を間桐に 託そう
言峰綺礼
疑わしいのは 最々承知でも 提示した条件は 旨味がある
時臣をすにかける 算段だけでなく 「聖杯の器」たる アインツベルンの 協力場所を調べ上げ
さらに 監督役の 体制令呪さえ 密かに継承している
制御 きな 身 こ 何よ 心強い

だがこいつの
緊張感がひどく
薄いのは何故だ
こいつの笑みが
子供が遊んでいる
時の表情に
見えて仕方がない
こいつはこの
共闘している状況を
ただ愉しんでいる
だけなんじゃないか
人揃って
人目に付く
のはまずい
まずは雁夜
君が先に戻れ
あんたは
まだこの場で
済ませるべき
用件が残って
いるのでね
忘れるな
雁夜
今夜零時だ
そこで君の
態度は
成就する

ドッ
人払いは済んだぞ
何者か知らんがそろそろ顔を見せたらどうだ？

今おぬしと
組んでいる
小童の身内でな
岡桐
屋敷
かっ
左様
ワシの名を
知っておるとは
遠坂の小倅も
弟子の躾が行き
届いておるな

間桐臓硯――
表向きにこそ隠居を
表明しているものの
魔道の秘術で
人ならざる
延命を繰り返し
数代を重ねて
間桐家を支配し
続けてきた
極めつきの怪人
ふるき味では
「マスター」である
雁夜より
作法において
数段勝る要注意人物

言峰綺礼
あの堅物の
璃正めの息子と
聞くが相違
ないかの？
いかにも
そうだが
ふむ――
意外よのォ
まさかあの男の
瓢からこんな
曲者が育つとは

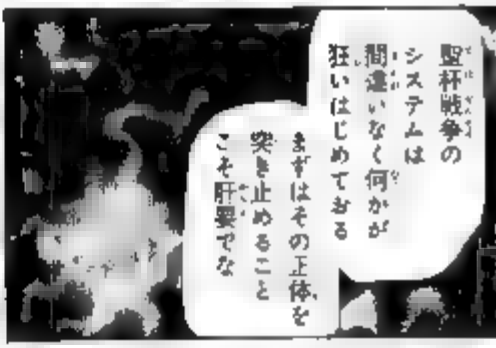
用件は
何だ？
雁夜の味方で
あるはずの御前が
なぜそんな場所に
忍んで覗き見を？

なに 雁夜めが
どのような
助勢を得たか
この目で直々に
見届けてやりたく
なったのでな
雁夜に取り入る
上でおぬしか
並べた口上は
余さずワシの耳
にも入っておる
何でも おぬしも
遠坂の小倅を
亡き者にしようと
企んどるそうだが

その通り
あの男は
我が父を
よせよせ 二度も
繰り返して戯言を
聞かすでない
賢しく
立ち振る舞い
すぎたの
おぬし 遠坂の
目を盗んで
動いているに
しては大胆すぎる
そもそも
時臣を亡き者に
しようと思い
立った時点で
おぬしなら雁夜の
手だてなど借りる
ことなく十全に事を
成し果せたはずじゃ
おぬしの狙いは
遠坂の小倅など
ではなく雁夜自身
じゃろう
違うか？
…… そこまで
私を疑うならば
なぜ雁夜に
忠告しない？

そうさのォ
まあ他愛もない
好奇心――と
いったところか
おぬしがどういう
手練手管で雁夜めを
壊すのか
ワシにも興味が
尽きぬでなぁ
間桐のために
戦う雁夜の
勝機をみすみす
潰していい
というのかっ
雁夜の？
勝機
じゃとっ
カカカ！
そんなものは
最初から皆無も
同然じゃわい
あんな
クズめが聖杯に
到るというのなら
それこそ過去二度の
殺し合いが茶番に
堕するというものじゃ
解せぬ話だ
間桐は
聖杯を悲願する
御三家の一角
ではなかったか？

フン
ワシに言わせれば
遠坂の小倅や
アインツベルンの
連中こそ
馬鹿の極みじゃ
実際 蓋を
開けてみれば
キャスターが
あのザマじゃ
明らかに
英霊とは程遠い
悪霊なんぞを
招きおった
前回の大番狂わせを
考慮すれば
此度の四度目が
おかしくなると
警戒するのは当然
ワシは最初から
今回は様子見に
徹すると決めていた


聖杯戦争の
システムは
間違いなく何かが
狂いはじめておる
まずはその正体を
突き止めること
こそ肝要でな

では何の
ための雁夜と
バーサーカーだ？
ただ傍観する
つもりだったなら
なぜサーヴァントを
用意した？

いやなに
せっかく
六年に一度の
祭りじゃからな
小童どもの
戯れを遠目に
眺めているだけと
いうのも味気ない
ワシとて
愉しみが
欲しくもなる

勿論万が一にも
あの出来損ないが
聖杯を掴み取って
くるならば
それに越した結末は
ないんじゃが

とはいえワシは
どうにも堪え性が
なくてのぉ
裏切り者の
屋夜めが困え
苦しむ様は
本当に——
ああ！
見ていて
飽きぬ
同類の勝利を
祈願したい
気持ちもあれば
屋夜の無様な
末路を見届ける
誘惑にも抗い難い
クク
まったく
迷い処よのぅ

貴様は
肉親の苦悩が
そこまで見ていて
愉しいか？
おお
心外よな
むしろおぬしは
ワシの喜びを理解
してくれるものと
思ったのだが
——なに？
ワシはこう
見えても
鼻が利く
雷蜂綺礼
おぬしからは
ワシと同類の
匂いがするぞ
屋夜という
腐肉の旨味に
釣られて迷い
寄ってきた
蛆虫の匂いがな

どうやらおぬし
自身の外道ぶりに
まだ照れを
残しておるのか
カカ
青いのう
自慰の如き
秘め事にでも
耽っている気で
おったのか
ほほう？
いささか
買い被り
すぎたかの
てっきり
同好の士を
得たものと
ばかり思って
いたが

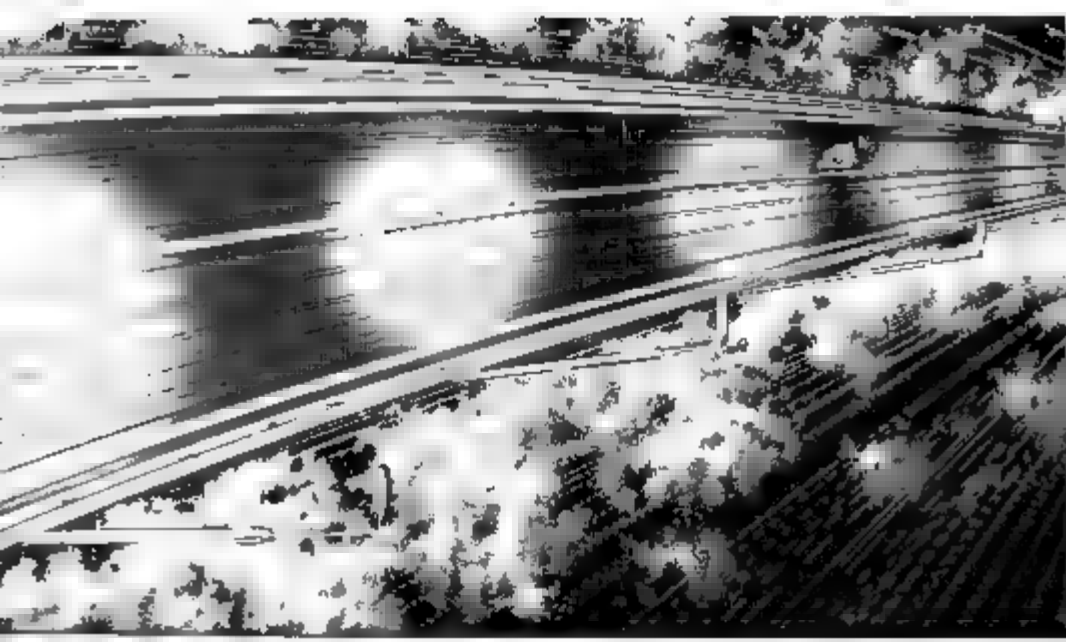
からかう
どなれば
命知らずか
教会の狗
番いとはいえ
ちぇ
怖い怖い

クカカカカッ
次に会うときまでにはワシを超える身体に鍛え上げておくがいい
己の未熟を天命に託すとは大ろせておくがいい

第 54 話 ／ E N D

第55話
何のつもりだ？
地を征服しての
統一にいに
しようというのか
そういう
心づもりならば
アイースフィールの
身柄を押さえる
必要などなかった
はずだ
いや
そこは
ライダー
その
悪意の
しかし――
ならば有り難い

車体の限界か近い
このままでは…まずい
ドドドドド
ガクン
やれるかどうか
試してみるしかない！



バイクが変身!!

スピードも上がってるぞ!

ライダーこのままじゃ追いつかれる!

おいちゃんと後ろ見てるのかよ馬鹿!

フンセイハーめ

ただの機械仕掛けを以てしてその走りまずは見事と称えておこう

がが――

生憎とこちらは戦車でな

ただお行儀良く駆け競べというわけにはいかんぞ?

余の
後輩を指する
とは こういう
ことだ セイバー!

すごい
ふはははは？！
上等！
それでこそ
誉れも高き
騎士のそれ！
まったく貴様は
戦場の華よな！
さあ 続けて
いくぞ——
木の次は
石の雨だ！

悔るなよ征服王！
今の抵抗で減速した…か

はあぁぁぁッ!!
風王結界(インビジブルエア)!!
うわあああぁぁぁ!!

せいやあぁぁッ!!
今こそ勝機――!

ライダーッ
立花!!
!!

ギギ…
ヴィリスフィールが
いなかった!?

そもそも
ライダーは一体
どこを目指して
駆けていたのか
この道の
先はアイリ
ベルンの森が
彼らは私たちが捜索を
変えたことを知らず
森の城にいる
のだと思いこみ
馬鹿正直に
攻め込む心算で
戦車を駆っていた
のではないか
クッ
何者かに
謀られたと
いうのか
こんな処に
いる場合
ではない
新都へ引き返し
アイリス
フィールを
捜さなければ
しかし……

やられる
ここで決めるしかない！

この距離
この位置関係は
遮蔽物のない
一直線の道路
危険
巻きぶえの
ライダー！
うん
仮にも余の
マスターである
貴様には一応
ここで一言
入れておかねば
ならんだろうな
これより余は
聖杯を狙う必勝を
差し置いて
ちょいと大きな
博打に出る
令呪で止めよう
と思うなら
今のうちだぞっ

オマエ…
本気でここから
仕掛けるつもりか？
この間合いから？
真っ直ぐに？
そうだ
セイバーが構えに入ってからアレを発動させるまでの隙に余の〝神威の車輪〟がこの距離を駆け抜けるか否か
という勝負なわけだ

勝算はあるのかっ
まあ五分だな
なんでオマエそんな無茶をっ

無茶だからこそ――さ
ここまで抵抗した状況から勝負を挽まれたら負けた方はそれこそ何の言い訳も面目も立たね
紛れもない〝完敗〟だ
あのこまっしゃくれた娘も自慢の剣をまさかこの間合いから踏み折られるとは思うまい
そんな形で完敗すればあ奴とて己が不明に痛み入り改めて余の麾下に加わる気になるかもしれん

オマエ
そうまでして
あのセイバーが
欲しいのか
うん
欲しいな
戦場において
アレは紛れもなく
地上の星だ
理想の王がどう
とかいう戯言なんぞ
ほざかせるよりは
余の覇道に加えてこそ
本当の輝きを放つ
というものだ

……やれよ
ライダー
オマエの
やり方で
勝てばいい
フフン
貴様もいよいよ
"覇"の何たるかを
弁えてきたようだな

彼方にこそ栄え在り
いざ征かん！
遥かなる踩躙制覇!!

1
エーク ノス
約束された——

勝利の剣(カリバー)
!!

あっちゃぁ
しくじったかぁ
！
うわっ！
あれ!?
まだ
生きてるぅ

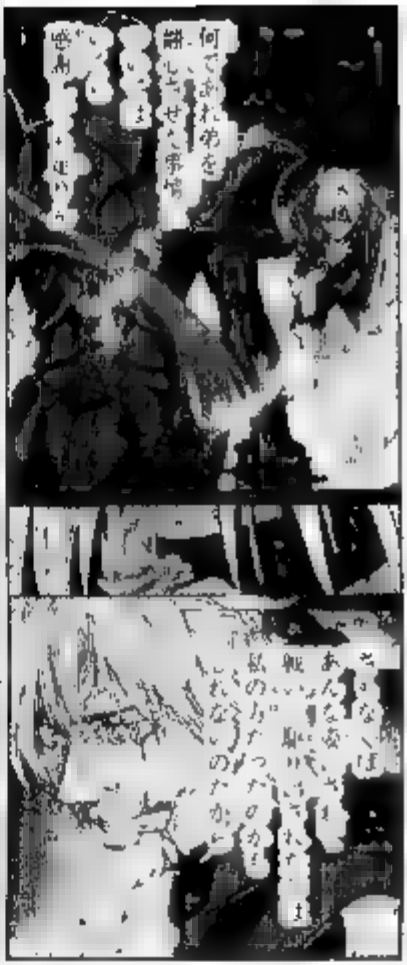
神威の車輪は
重撃な
唸り一
ライダー！
「王の軍勢」
を！
あれは
アーチャーに
とっておくと
言ったであろう

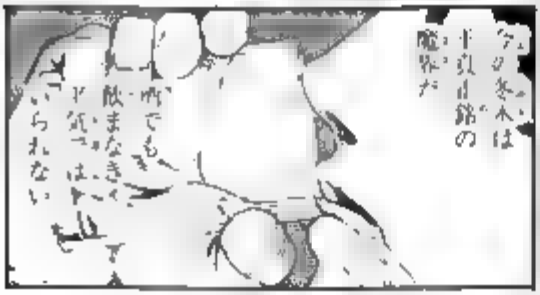
行っちゃったぞ……
？
ハイクか……
ふむ あれは良いモノだ
――ッ
オマエ勝負に負けた後の第一声がソレか!?
なあライター
ボクらどうやって街まで帰るんだ？
そりゃあまあ歩くしかないわな
そうだよな

第55話 ～ E N D

第56話
何が聖杯戦争だ
雁夜め…
なぜ今になって帰郷し
聖杯戦争に参加しようなどと思ったのか
まったく
理解できん
——
そもそも
理解したいとさえ思わんが

あんなモノどもが
今もこの夜の闇のなかで
血肉を喰らいあっている
と知っていれば
正気で
いられる方が
どうかしている


何であれを
話してくれないのか
理由
私の方からは
聞けないのか
さっきは
あんなに
聞いてほしそうだったのに


今の冬木は
半径1キロの
魔界だ
一晩でも
飲まなきゃ
正気では
いられない

と共に
口外
難しかった
ところだが
桜を地下の蟲蔵で
調教し
間桐の次期頭首として
相応しい器に仕立て
しまうという
話から
御せんかった
重要な役目があるからな

いま眼前の正道を
踏まえているものは
私の方だ
私自身の
確かな証拠の
何もない
たとえ子供一人を
救うものにするしか
術のない身でも
真っ暗闇の未来へと
踏み出す道を歩んで
いるのは自分の方だ

……アイリス
フィールは
どこだ？
あひっ
ひゅ……
答えられなければ死ぬ
殺される！
——はっ
待て！何をいってるんだ
この男は
質問の意味がわからないぞ？

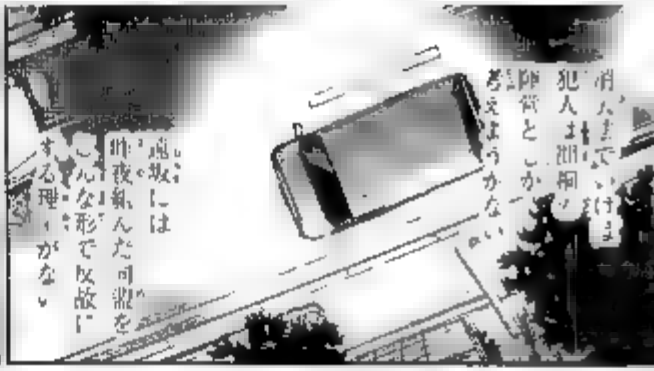
わ、私は…
私は……ッ

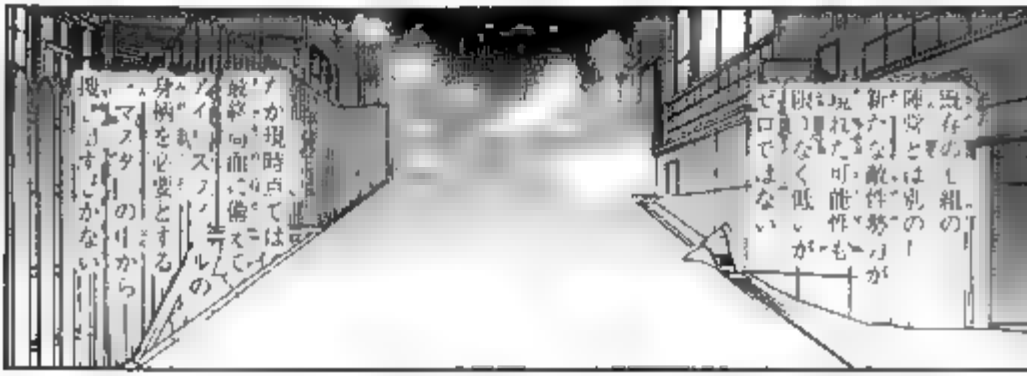
ししししし知らない
知らない知らない！
私は何も
知らないッ！
あああああッ！
手がッ！
ぎゃあ
あああッ！

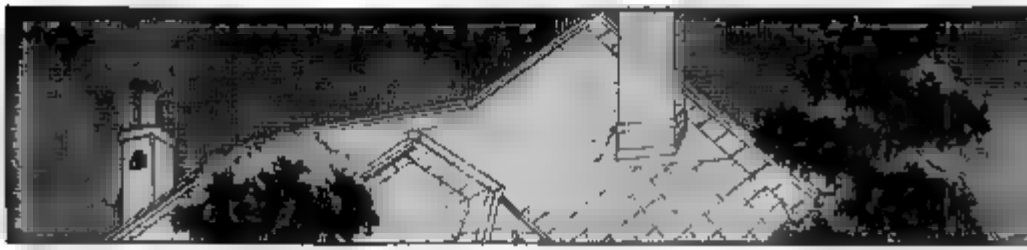
いつ…は
問い質しても
無駄な
この数時間の
事について本当に
何も知らない
クノッ！

拉致されたアイリが
連び込まれたのは
この土桐邸ではない
数時間かけて
防護結界を突破
したのに収穫なしか

まさかライダーの
マスターがあの
隠れ家を看破するだけの諜報能力を
なかったはずだ

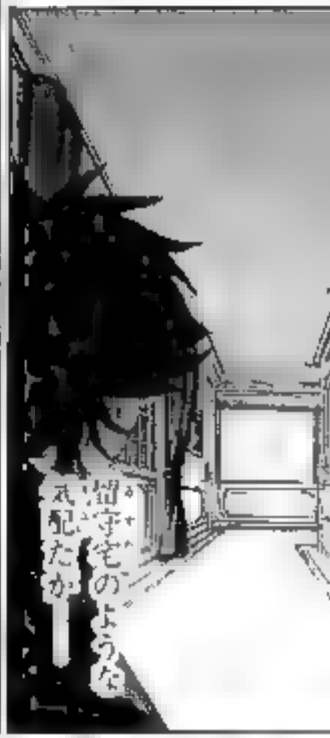

消えたまではいいが
犯人は遠坂の
陣営としか
考えようがない
遠坂には
昨夜組んだ可能性を
こんな形で反故に
する理由がない

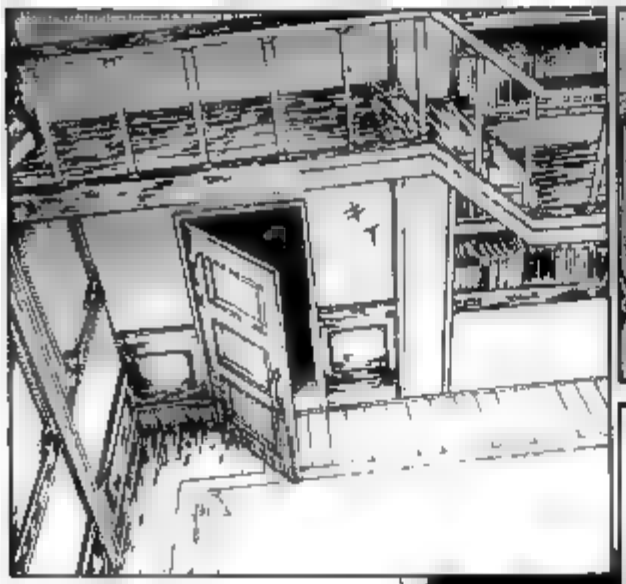

残りの3組の
陣営とは別の
新たな敵性勢力が
現れた可能性も
なくはないが
限りなくゼロではない
今現時点では
ライダーのマスターの身柄を必要とする
マスターの中から
捜すしかない

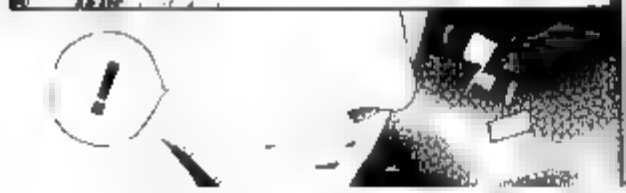


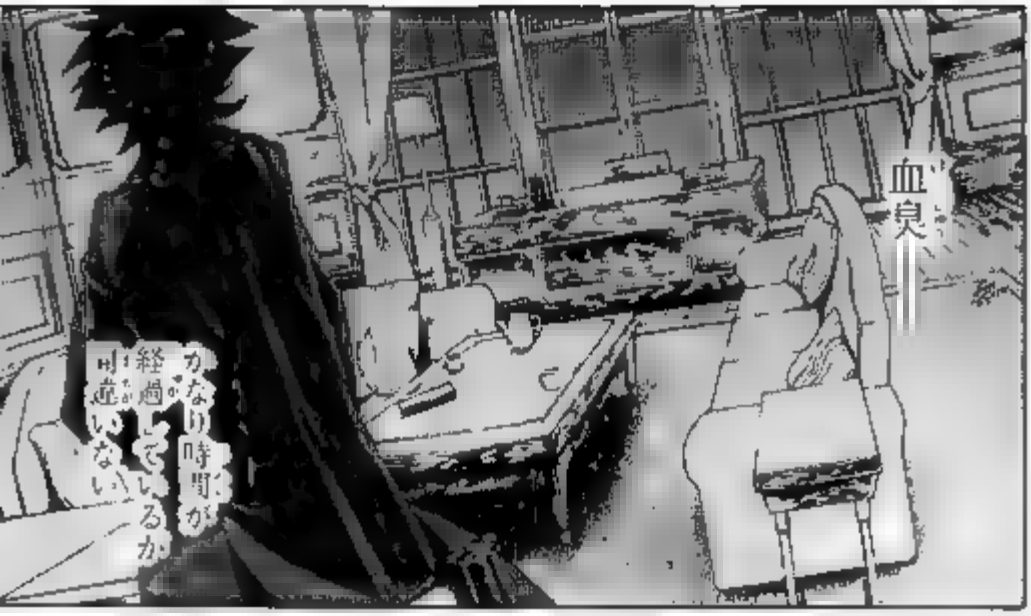
結界の解除で
ここまで来るのに
もう時間
クノ
ゴッ
アイツを追うはずの
ヤツ
実戦で
判断
せざるをえない
無事に保護
おそらくマイト
俺の指令を待動
俺に次の指令
ここはどこ
私
魔人倶楽の経路
手応えがある
撃破されたという
ではないはず
キリキリ
ガ

できれば避けたいが
戦略を選べる
大元ではない
遠坂時臣と
鉢合わせになった
場合は脱落を
覚悟しておくべきだ
その場合には
アーチャーに捕えて
まず令呪を消費して
セイバーを呼び
戻せる必要がある
マスクの敵が
押さえている
間桐や遠坂と対決し消耗
するのは敵の思う壺だ


留守宅のような
気配だが


キイ


!


血臭
かなり時間が経過しているか
間違いない

媒介や術の起点としてとかく魔術において重要な要素となるのが血液
呪術的な意味もなく血液をそのまま放置しておくのは魔術の嗜みとして論外ともいえる

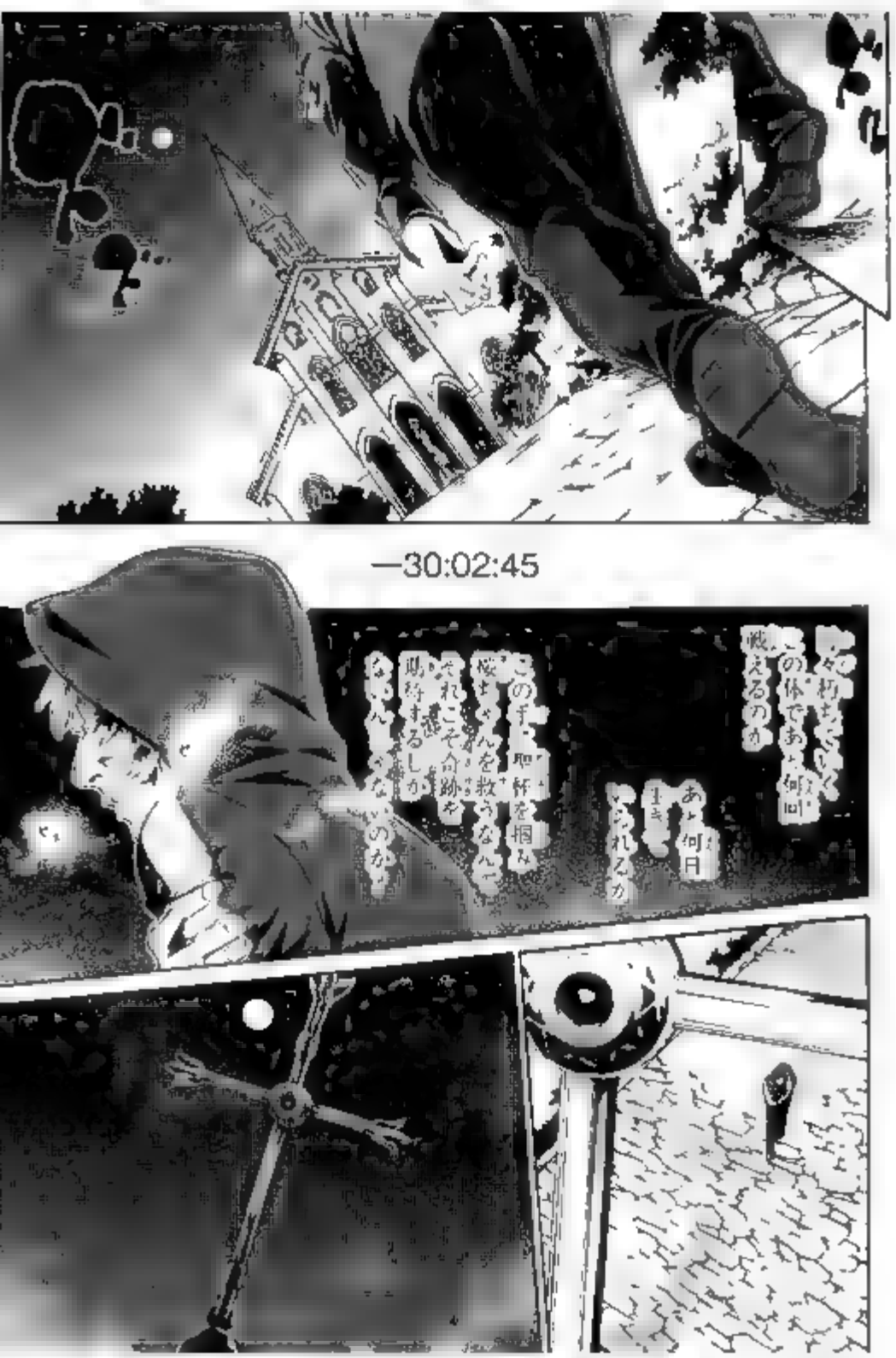
飛び散った飛沫ではなくがたの怪我で済む出血量ではない
経験上一刺殺された人間か潰れた後の染みのように見える

ここは
遠坂時臣の
工房か
おそらく時臣
イカれたところか
いるの様子すら把握
できない状況にある
ハレ儀中でも
魔術師が
無断で他者を踏み
込ませるはずがな

ボン
M
ここ数十の間
洗面所で髭を
剃った人
は
一人だけ
その人物の
血液か客間の
カーペットに
染みでもつく
これで遠坂時宗の
死亡ないし脱落は
ほぼ確定と見て
間違いない
即刻ご戦闘の
跡はない
放置された
カップは
もう客人の歓待を
不要としている
この部屋で時臣は
客としてもてなした
何者かと歓談した後
重傷ないし
致命傷を負った

遠坂時臣の知己であり
彼が資客と見なして
隙を見せても
おかしくない人物
アーチャーの新たな
マスターとなり得る
今から改めて令呪を
獲得した可能性が
大な——
即ち過去に
サーヴァントを喪失して
マスター権を失い
かつ未だ存命の人物
まさかマスターの領地を
監視していた覚もな
取えてその可能性が
あるとするなら
時臣が既に
マスターとして
出奔みたのか場合
人なる契約者と
出合わせたで
時臣を謀殺したのない
この結末にも納得かいく

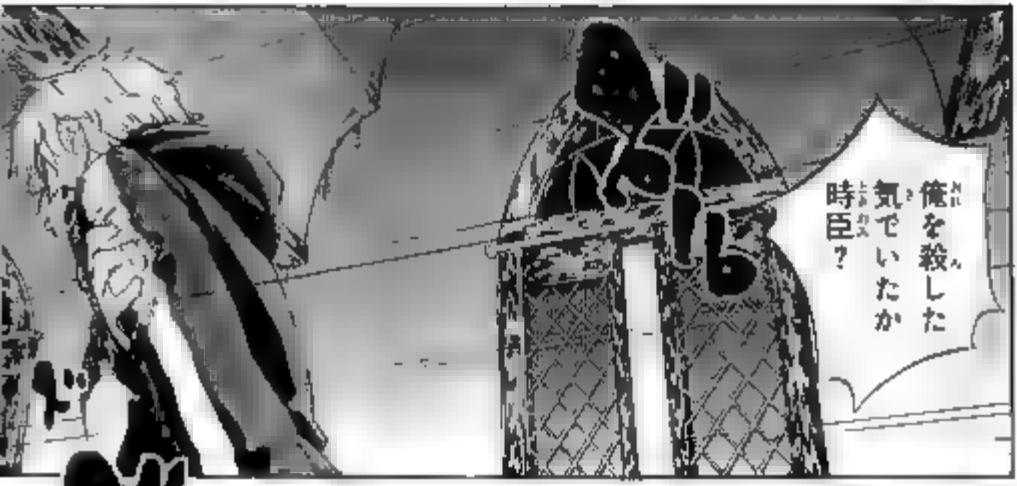
言峰綺礼

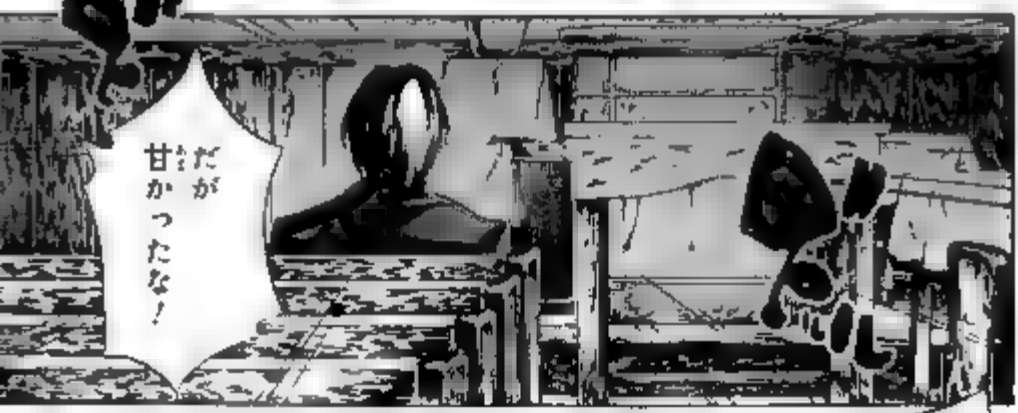

—30:02:45
刻々と朽ちていく
この体であと何回
戦えるのか
あと何日
生きられるか
この手で聖杯を掴み
桜ちゃんを救うなんて
それこそ奇跡を
期待するしか
ないのか

冗談じゃ……
ない……ッ!
なにも自分は
救いを求めて
こんな時間に教会に
赴いたんじゃない!
今夏こそ奴を
殺すんだ!
炎さんを
奪った時間を!
桜ちゃんを
奪てた時間を!

この手で
叩き伏せる！

……？
遠坂……
時臣イ……ッ！


俺を殺した
気でいたか
時臣？


だが
甘かったな！

貴様に報いを
与えるまで
俺は何度でも……！

遠坂——

何故
何な――
――ッ！
時臣が死んでいる？
時臣が死んだら
どうなるんだ――
俺は一体なぜ時臣と戦っ
俺を守って聖杯戦争に参加
雁夜くんっ

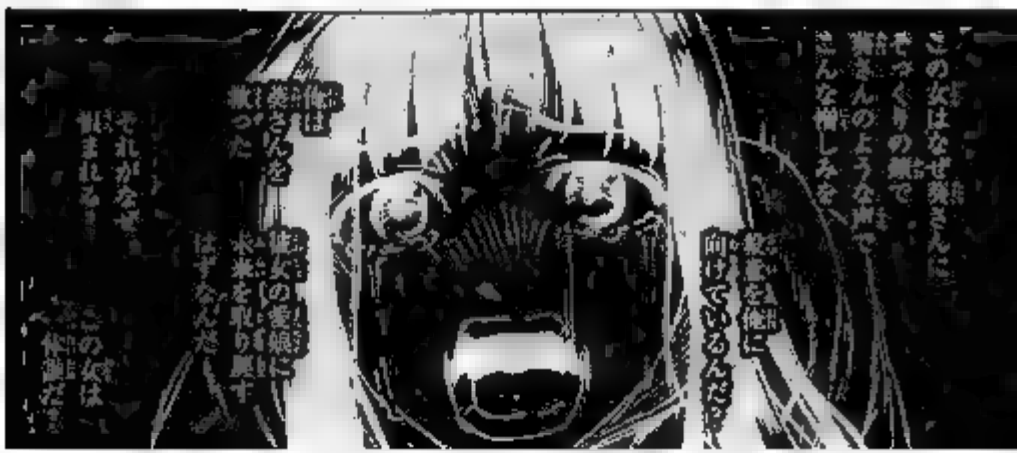
愛さん
俺は

ドッ
あう
あ

故郷さんは
俺を見よう
としない
この人は時臣が見ていない
この人は何なんだ
俺は 一度と葵さんを
助かせないよっにと
命を捨てて戦ってきた
ならば目の前で
泣いている
この人はいったい
誰なんだ？
これで
聖杯は間桐の
手に渡ったも
同然ね
満足
してる？
雁夜くん
俺は——
なぜ諦められなければいけないっ
だって
俺は——

あの男さえいなければ
全てがうまくいくはずだった
憎悪の根源
坂時は
だった
そもそもなぜこいつはこんな海辺で死んでいた？
どうして…よ…
間桐は私から桜を奪っただけじゃ物足りなかったの？

よりにもよってこの人を私の目の前で殺すだなんて……
どうして？
そんなにも私たちが憎かったの？
わけがわからない


この女はなぜ発さんに
そっくりの顔で
発さんのような声で
こんな憎しみを
殺意を俺に
向けているんだ？
俺は
発さんを
愛した
彼女の愛娘に
未来を取り戻す
はずなんだ
それがなぜ
憎まれる
この女は
体験だ

そいつが――
そいつのせいで
その野さえいなければ誰も不幸にならずに済んだ
あんたなんかに何が解るっていうのよ！
お姉さんたって姪ちゃんたって幸せになれた筈
ふざけないでよ！
あんたなんか……
誰かを好きになったことさえないくせにッ！

オレ……

に…は

好きなヒトがいた

温かくて優しくて
誰よりも幸せに
なってほしい
ヒトがいた

彼女の為ならば
命さえ惜しまないと
そう思ったからこそ

今日まで
どんな痛みにも
苦しみにも
耐えて
耐えて
耐えて
耐えてきたのだから
報われなければ
嘘だ

黙れ
まだ俺を
脱るのか
ガリ
黙らせなければ
すべてが終わる
今までの
すべてが
無意味になる

そんなことが
許せるわけがない

……あ

あ…あ……
あアアッ！
あああぁああアアァ
あああァああ……ッ！
ぁあアアッ
あああアァぁぁあ!!

このワインが
こんなにも
味わい深いとは
気付かなかった
……何故
だろうな
前にも飲んだ
ことがあると
いうのに…

くだらぬ三文劇
ではあったが
まぁ初めて書いた
台本にしては
悪くない
とうぞ納礼の
感想は

酒の味というやつは
育ちによっては
悪いのほか
化けるものだ
新礼よ
とうやら見識を
広めることの
意味を理解し
はじめたようだな
そう寛いで
ばかりも
いられない
遠坂葵の容態は
間違いなく
手当てを必要と
するだろうし
間桐雁夜を
回収して次の
役目を仕込む
段取りもある
だが
これほどに美味と
感じる肉ならば
ぜひまた
飲んでみたいものだ

第 56 話　　E N D

優雅
凛が成人して
独り立ちの資金か
ないと気付いた時の
顔はきっと見物だろう
今夜に備えて
良い酒でも
買っておくか
遺言状のおかげで
遠坂の資産は全て
私のものだ
景気よく
使ってしまおう
己の内なる本性を
受け入れ始めたのは
良い傾向だが礼節上
随分と急な
心変わりではないか
過去の己の所業を
改めて振り返って
みたのだ
いずれも無意識の
行動だったが
思い当たる節が
多くてな
ほう
例えば？

凛がトイレに入るタイミングを見計らって紙を全て回収したり

くっくっくっ

おっと失礼

HAKKEI

きりげなく凛の足の小指を柱の角にぶつけさせたり

ツ!!

夜明け前に凛の小学校に潜入して凛の靴箱に呪いの手紙を忍ばせたり

凛の靴に画鋲を仕込んだり

アサシンに不審者の真似で凛をストーキングさせて怖がらせたり

悪夢を見るように睡眠中の凛の枕元で延々呪詛を唱え続けたり

うろん

魔術師の真実を描いた絵物語を読ませて現実を教えてやったり
え～っとお父様が読むように言ってた初資者用の本は…
これだっけ
あれ？何か挟んである
マスター3名が一堂に会した場合の行動予測……？
うえぇ……みんなが戦ってる理由が……
小学校低学年の私でもこんなことしないのにお父様まで……
え？これが魔術師の典型？ウソ……幻滅…
あでも一流の魔術師はこんなこともできるんだやっぱり凄い…
バリーン
いやいやまさか
キレイのイタズラ
えこなバケモノ
といった具合だ
無意識でそこまでできてたまるか
日常の習慣になっていて記憶に残らなかったようだ
余計に悪質だな
優雅
しかし――

衛宮切嗣
あの男が聖杯に求めるものとは一体……

土蔵が襲撃を受けた直後

って僕は何を考えてるんだ
これじゃただのヤク中じゃないか！
空にイリヤが見える…
禁断症状だ…
でもやめられない止まらない！
あ！なるほど
そうか！この腕いは聖杯に託せば良いのか！
無事でいてくれアイリ！それに舞弥！
だめだよ…
ないたら…
けさやっと…昔のキリツグになったんだから
こんなことで壊れたら…だめ…
——ッ！
泣いちゃダメだ！泣いちゃダメだ！

番外編
◆Master's personality◆
END